

雲裡坊著『答問書』

伊藤 善隆^a

^a 湘北短期大学非常勤講師

【キーワード】

俳諧 伝書 雲裡坊 杉夫 『答問書』 『俳諧三十一ヶ條秘伝』

はじめに

本稿では、雲裡坊（元禄六年～宝暦十一年）の伝書『答問書』（個人蔵）を翻刻する。

雲裡坊は、渡辺氏。支考門の俳人で、初号を杉夫、別号を有椎翁・三四庵・鳥巢仁などと称した。尾張の人だが、のち名古屋から桑名に移住。さらに大津の無明庵五世となつて、義仲寺境内に幻住庵を再興し、没後は義仲寺に葬られた。桑名に移住した時の記念集である『柱隠』（享保十三年自序）、支考十三回忌集『桑名万句』などの編著がある。

『答問書』は、その雲裡坊の俳諧観や俳論を伝える内容を持ち、享保・宝暦期における俳論や伝書の流布を検討する上でも興味深い資料である。たとえば、第六段「曲節二体の事」には、「附句に曲節地」があると述べる。付句の案じ方について解説した記述だが、現代の私たちが当時の連句を解釈する際にも参考になる内容である。

なお、翻刻にあたり、『答問書』と概ね同内容の伝書である『俳

諧三十一ヶ條秘伝』（個人蔵）を偶目することができた。両者を比較すると、書名と奥書が異なる他、本文各章にも細かな異同が多数認められる。また、『答問書』の最後の段（愚坊弱年のむかし）は『俳諧三十一ヶ條秘伝』にはない。

その本文の異同だが、第一段に限って具体的に示せば、以下の（表）の通りとなる。

（表）

『答問書』		『俳諧三十一ヶ條秘伝』	
今以		をもつて	
人べんを用候事		人篇を用ひ候事 ^二 候	
古人なしと		古なしと	
むづかしかりて		むづかしかり	
伝へ給へとも		伝へ給ひとも	
出し被申候		出し被下候	
減後		減後	
俳諧は我師につたへす		俳諧は我師に伝へす	
強て我家は		強て我等は	
タハムレカナフ		たわむれかたう	

右のような細かな異同は、全体にわたって多数存在する。また、双方ともに意味の通じない箇所、すなわち誤写と思われる不審の箇所が相当数ある。そこで、底本としてどちらに拠るべきかという問題が生じるが、本稿では、どちらかと言えば不審の箇所が少ない『答問書』を底本とすることとした。たとえば、右に挙げた第一段の異同の中でも、『俳諧三十一ヶ條秘伝』の方は、「古人」とあるべきところが「古」だけであったり、「給へとも」とあるべきところが「給ひとも」であったり、「俳」を文脈上不適切に「俳」と書いたりし

ている。また、たとえば第二段で、『答問書』には「史記素隠」と

ある箇所を、『俳諧三十一ヶ條秘伝』が「史記素淫」とするのは誤りであるし、『答問書』に「昔」とある箇所を、『俳諧三十一ヶ條秘伝』が「首」と誤って書いている箇所も複数ある。さらに、『俳諧三十一ヶ條秘伝』には以下の脱文があることも指摘できる。

- ・「絵讃の事は、唯人物画像の讃にて候」(第一八段「絵賛の事は」)。
- ・「格別の事候。畢竟、脇は発句の下句と」(第一九段「脇の事」)。
- ・「一句の吟声に拍子を残さす。四句目からく」ととり」(第二〇段「第三の留り」)。

・「生花に不植の正花と申事無之候。然に、ある人、晋子門人のよし、此」(第二段「月花の事」)。

・「よりはじめて、附句の意なれば、こゝに俳諧」(第二六段「三ツ物の事」)。

なお、細かな本文の異同を全て示すことは煩瑣であるため、底本の本文を、『俳諧三十一ヶ條秘伝』の本文で補ったり、参考にできたりする場合のみ、その本文を「」で括って示すこととした。すなわち、あくまで異同の一部を示したものであり、本文中の異同の全てを示したものではない。また、『俳諧三十一ヶ條秘伝』の奥書は、本稿末尾に翻刻することとした。

さて、この『答問書』と『俳諧三十一ヶ條秘伝』の関係と同様、全く異なる書名ながら、ほぼ同内容の別の伝本が存在する可能性も考えられよう。諸本に関する調査はいまだ不十分である。今後の課題としたい。

〈書誌〉

『答問書』(底本)

書型……写本一冊。大本。袋綴じ。楮紙。

表紙……濃縹色。原表紙か。縦二七、〇cm×横一八、四cm。

題簽……中央無辺。卅繋ぎ雲母刷料紙に「問答書 全」と墨

書(傷みが激しく、角書の一部が判読不能だが、「蕉門」か?)。

内題……「問答書」。

写式……無辺無界。每半葉一三行、二五字内外。

字高……二三、四cm(本文初行「一はいかのの古今抄に御覧」を計測)。

奥書……「林鐘日 雲裡／松水雅丈」、「湘夕言」、「宝曆元^未仲春日写之^{江津和常}門葉」、「明治三十六年三月上旬求之未

青」。

丁数……全二五丁(墨付二五丁)。

『俳諧三十一ヶ條秘伝』

書型……写本一冊。紙釘綴。楮紙。

表紙……本文共表紙表紙(本文料紙を二枚重ねて二ツ折にしたもの)。縦二六、一cm×横一六、一cm。

題簽……表紙左肩に「俳諧三十一ヶ條 全部」と打付け書き。

内題……「俳諧三十一ヶ條秘傳 杉夫授傳」。

写式……無辺無界。每半葉一四行内外、二七字内外。

字高……二二、一cm(本文初行「一俳諧の古今抄」を計測)。

奥書……「寛政五^{癸丑}年夾鐘下句^{静月庵}美淵」。

丁数……全二五丁(墨付二五丁)。

備考……裏表紙なし。

〔凡例〕

翻刻にあたっては、句読点を適宜補い、改行も適宜改めた。原則として片仮名は平仮名に改めたが、小字で添えられた語尾や助動詞の片仮名はそのまま残した。異体字は概ね通行の字体にあらためたが、原本の表記を残した箇所もある。濁点は原文のママとした。また、「ヨリ」の合字は、「より」とした。

原本の各丁片面の終わりに当たるところに「をつけ、（）内にその丁数および表・裏（オ・ウ）を示した。

誤記と思われる箇所も原文どおりに翻刻し、適宜その傍に「（ママ）」を付した。

難読の箇所は□で示した。虫損により判読が困難な箇所には、その傍に「（虫損）」と付した。

参考のため、原本の図版を最後に示した。

〔翻刻〕

□ 答問書 全

（白紙）

「（表紙）

（見返し）

答問書

一、はいかゝの二字に言篇人篇の論は、大むね十論古今抄に御覧被成候得共、芭蕉翁在世の撰集には、多く言篇人篇の二体を出されたる事如何との御尋、御尤の事^ニ候。此故世間の宗匠達、今以俳諧の争不絶候。其衆中は例の書籍を枕にして、聊も師伝無之故^ニ候。古翁さへかく二やうなれば、今更改る事有ましなど、覚へられ候事、尤の事^ニ候。いかにも当流は、人べんを用候事、其謂は古翁は初て滑稽の俳諧を見附、扱こそ俳諧に古人なしといへる事を常く門人にさ、やきながら、例に其身の徳を包て我より世間の

の人をためさす。もとより世間の褒貶をむづかしかりて、門人にその意は伝へ給へとも、撰集は天下の人に対するゆへに、扱こそ二やうには出し被申候。しかれば、其門弟、其徳をしたひ^{（オ）}其行を学より、誠後^{（誠後）}にいたりては、師の謙退を続くべきにあらず。全く徳光をか、けむとするより、古翁の趣意を押立て、俳諧は我師につたへたり。俳諧は我師につたへす、強て我家は人篇也といへる、此等を弟子の大任とは申候。俳諧の二字はタハムレカナフと訓して滑稽の事なるよしに候。

一、十論、古今抄を御考候処^ニ、当流の俳諧は滑稽諷諫の道、史記索隠に滑稽猶俳諧といへる證文なりと見へたり。しかるに今はいかゝの句々にいたりて、いつれか諷諫の意に候哉と。是又当流の一大事^ニ候。いかにも句々各諷諫の意にて候。其謂は、古翁已前の俳諧は、一句に始中終をいひ放して、余情といふ事聊も無之候。当流は其始中終の中を^{（終）}塗て、余情に聞せ候。此趣も十論^ニ句を引て出され候へとも、未御心得無之候哉。惣て諷諫と申事は其事をその儘に諫る事には無之候。たとへは、白かれと諫る時は^{（ウ）}黒きを諷して黒き事のあしきを知らせ、黒かれと諫る時も白を諷しておのつから其人の悟道するやうにおかしく寂しいひ廻す事^ニ候。史記の滑稽伝に御考可被成候。されは、古池や蛙飛込む水の音といへるは、句中に寂の字も閑の字も無之候得共、此句を能々詠吟すれば、おのつから寂寞の余情有^リ。或は、六月や峯に雲をく嵐山といへるも、句中に炎とも暑とも無之候得共、此句を吟^ルに、名にあふ嵐山ならはいつも嵐はすへきに、其嵐山さへ峯に雲のかゝりたれば、そよとも風の吹さる炎暑の堪かたき情はあるへし。此余は是に准して御工夫可被成候。かやうに寂しかれともあつかれとも言語には発せずして、聞人々のおのつから其情知るゆへに諷諫の道とは申候。此故に、当流にはいかほと手妻を尽

に前句の情を聞て姿を後に附るゆへに、二句の間に姿なく」(七)
只ことの前の句の理屈となり噂と成候。二句の間に姿なき時は、余情無之候。余情なき時は例の諷諫に叶ひ不申候。人篇の俳諧にては無御座候。併、畢竟は発句も附句も言語の遊びなれば、是を以俳諧の道の足代として、これより談笑諷諫の道理をさとしめんが爲なりと御執行可被成候。別而當時の実字は旦暮の人和に行かたく、まして神道は正直の鏡とや、農家商店の行^イかたき事とやらん承候。然は今日を俳諧に行^イ、内には仏道をも心かけ候事、人情の急用かと存候。

「古翁の夜話に、俳諧はすへからず、俳諧に遊ぶへしの事、是又大切の事^二候。是は俳諧の發明にて、はいかるのみにかきらす。人情は、すべて信遊の二ツに過へからず候。別而唯今遊の字の心は、今日士農工商の家に生れて人々格々の業有職有。その家業片時も怠る時は、その家斉かたし。されは終日終夜に厲むといへとも、あるは倦^ミ、あるは」^(三) 労る時あり。さるは其身の奉公と思ひ、職とのみ思ふゆへ也。然に、遊ぶといふものは、おのかさまぐ^にに、終日とい、終夜といへと、面白^(四)心にひかれて、倦事もなく労る時もあらされは、其業其職を、我は仕官に遊び、我は家業に遊ぶ物ぞと心得たれば、例に倦事もなく、労る事あらしと。扱こそ、俳諧の執行も学文も、是はする事と思はんよりあそぶ事と心得よと、物に倦さるの教訓にて候。是らに人を追ひき候ゆへに、当流には俳諧を道と申候。かくのことく、先能々俳諧の道を^二知りたるを、蕉門の門人とは可申候。たとへ句々に天下の人を驚かし候とても、家を亡し身を失候はん族は、蕉門の俳人とは申間敷候。

一、日外愚評を御請候卷、殊外六ヶ敷俳諧^二候故、重而は只俗談平

和に被成候得と申進候処、其御答に、古翁曰、俳諧は俗談平和を
たゝさんか為也とあるゆへ、當時に京江戸の宗匠もかくのことし
と御申越候。それらの宗匠を例の推量と申すにて候。蕉門の俳諧
は」(オ三) 全く俗談平話を扱ひ申候。俗談平和に風雅を調申故に、
正す事三ツ有之候。一、否味、二、賤味、三、雅言の滑りにて候。
一、否味とは、或は三味線をシヤミといふ、尺八をタケといひ、
黒羽織をクロハといへる類ひ。二、賤味とは、或は黒小袖といふ
へきを黒羽二重といひ、紅を本紅といひ、足袋をふくろたひと
いふ、真鷹、真鴨の類。三、滑りとは、うは玉、久かたの類。此
等は曲節の模様には適々用る時も有へく、否味、賤味は俳諧なら
ても正すへき事二候。俳諧の句とても王侯貴人の前に出へきを、
卑下の事は俳諧の家の恥辱にて有へく候。むかしある宗匠の句に
年波や一歩の錢にもしほ草

一、俳諧は、中品以下の人を風雅に道ひかん為とは、此等に古翁を御存あるべく候。和歌連歌は花鳥の艶詞をあつかひ、俳諧は俗談平話を扱ふ。されは中品以下の人は、士農工商の人也。其四民は其^(オ四)其職にせはしかりといへとも、風雅を知らされは志し賤し。さりとて、雲の上の艶詞に遊びなは、その業職を忘れ候はん。仍而朝夕の俗談にも風雅を教へて俳諧の一道は建立いたされ候。むかしの俳諧の道をわきまへず、今の俳諧に道を開^キたりと可申候。道といひ風雅といへは、例に俗談平和を正^(マ)さんとは申候。且、人においては如是、和歌に對し連歌に比すれば、其体も又中品以下にて候。しかりといへとも、今詩歌連俳の四家と成候へは、高官高位とても俳諧有ましきにあらす。その謂は、諸候も太夫も貴僧も高僧も、その人^(マ)の俗談平和にしもあらす。俗談平和^(マ)有時は、俳諧貴賤によらず、尊卑を隔すと可申候。仍而十論にも、武家の余力には俳諧を学べしと。誠に治国齊家の一助たるべく候。

一、曲節二体の事は、前度も申進たるかと覺申候。発句に曲節地の体とて、差別無之候。唯流行と不易と強ては真行草の体^(ウ四)のみにて候。句作の法は東花集に御覽可被成候。曲節の地とは、附句の上にて候。惣して発句は一句に曲節を籠たる物にて候得は、其曲も節もなきは平句と申候。たとへは 辛崎の松は花より臈^節にて、如是曲節有時は、たとへ切字無之とも、平句にあらされは、発句にて候。此句を世間から崎伝授とてほのめかし候得共、その伝授の句意、甚相違いたし候。例に推量の沙汰にて候。但し、此にて留りは字面の曲節而已にあらず。世間の伝授のこときにては、哉けりといふにもあらす。口伝ならては書顯しかたく候。不易と流行との二体は、先師有とし

不易 はる風や障子の日影燃ながら

流行 若菜つむ日は心せよ疝氣腹殿

是等に御心得可被成候。然とも、不易は好へく流行は好ざる事^ニ候。不易は千歳不易と申、流行は一時流行と申候。附句に曲節地と^(オ五)申候は

前 俄の雨に傘のせんさく

地 喰さした飯に蓋する蠅の中

是は前句を夕立の雨と見るより、夕飯の時分を案し、夕立には外面の蠅もむれ入れは、せんさくに立し跡の飯に蓋したりと、是を地の附方案し方と申候。

○ 俄の雨も傘のせんさく

節 すへるなと畳のはしこたらまへる

是は前句に節をつけて此傘はいつかたをせんさく尋廻^ルぞと、前句を見るに高^キ所をさかすと見るより、畳の上に階子をかけて、下に壱人は階子をか、へて居る様也。俄の雨と、これも久しき日であり、あけくの夕立なれば、傘の置所もわすれたるに、急用の事なれば、心せきにすへるなと、^(ウ五)声をかけたる眼前のさまなり。曲とは

○ 俄の雨に傘のせんさく

曲 猫も見て我をる階子のあかり下り

是は前の趣向を「其儘に」句作りに曲を尽せり。曲とは地をも節をも句作りの曲也と御心得可被成候。此外十論為弁抄にも出され候。御考可被成候。

一、発句はいか、案したる方かよく候や、御心得被成かたきよし、御尤^ニ候。ほつ句は先趣向を得て、其後句作りに功者不功者の有之事^ニ候。それを世間には正風の体は只かるくするかよしと例の推量ゆへ、趣向も句意も弁へす。字面の句振のみ似せしゆへ、多クは平句に切字を添たる計にて候。先趣向を得ると申は、私に

作り立、私に案し出ものにては無之候。趣向は全く天より稟る物にて候。此故に発句の趣向は得るといふ、附句の趣向は立るといふ。其謂は、千日」(オ六) 千夜案したれとも無趣向を、物によつてふと得る事有り。其ふと出来たるは、必句作りも口にたまらず、しかも能句なるものにて候。唯、私にねりつめしたるは、必よき句にならず候。それはいかにして天から稟る事「そとなれは」、それは先たとへは梅の題を探りたる時は、全くその梅に信をおこして、聊も私の細工塩梅を立へからず。その信いたる時は、必其梅よりふと趣向を得ル。是を天稟の趣向とは申候。それ句は必人の耳口に残ル。只人作の趣向には、人の驚かぬ筈にて候。聞人もやかて作るべき事故に候。此等の事にや、貫之も古今の序に、ちからをも入れすして天地を動し、目に見へぬ鬼神も感せしめ、猛武士の心を和らくるは和歌也とぞ。なんそ人作の趣向に天地を動し候はんや。是、天稟の趣向を得たれば、鬼神も猛武士も、ましてや常の人涙を流さて有へきか。されは小町か雨乞も、趣向天より請たれば、雨とも風とも成へき事候。全く小町か」(ウ六) 趣向にあらず。小町よく信にいたりぬれば、天是を憐み給ふと可申候。ある人一とせ五月の早に雨を祈とて、俳諧歌

○ とらか涙さへとし／＼に降る雨を

なと幾万の人のなみたそ

晋子一とせ三圍の社に雨を祈とて

○ 夕たちや田をみめくりの神ならば

前の作者は能信にして趣向を得たり。後の作者は常に大酒して、しかも其日は殊に酔たり。酔たるゆへに聊も私なく、全く其人虚なり。虚なるゆへに天稟の趣向を得たり。各天稟の趣向なれば、各感応の大雨は降したれとも、晋子は一生此意を知らざるもしらす。誠に虚実の事を存候得共、能信なる時は、自己の謀なき其心

虚也。能酔たる時は、我なきゆへに又虚なり。されは季白(李白)か不用意に妙を得たるも、例に一斗の」(オ七) 機嫌なるへし。爰を以、曾子曰、人之将死其言善也とぞ。人も死期に臨ては我なし。我なきゆへに能虚也。虚なるゆへにいふことよしと見へ申候。さらて季杜か酒を学へとはあらず。爰には能信を知るにはしかず。不信に調ふ道はあらずと御覧可被成候。さるを世上の俳諧は、例の推量に蕉門／＼とは申候得とも、先其題に信をおこす事をしられは、落題の句も折／＼聞へ申候。此頃ある人重陽の句とて書付て贈られける

耕作を仮名て習ふや菊畑

〔麦阿〕

或人此句を難て曰、此やは口合のやなるへし。さらは、此耕作は目前の事也。秋に菊畑の耕作といふ事なし。春耕夏芸の例によらは、此句は春の菊畑なるへし。秋の季にもまして重陽の句には有へからずと。尤の難問候。是等に例の推量を御察可被成候。句の新古はさらにいわず。春と秋との差別なきは、例に其題をとり」(ウ七) おきて、何やらかやらの自己の塩梅を先に案するゆへに、いつか当季たに忘れけるは、浅ましき事にて候。又人に招かれて挨拶の句などは、彼趣向を待へきにもあらねば、そこら眼前の物を以ていかやうにもほとよく句作るか能御座候。案し過たるは不興の事候。されは、挨拶なれば其句の意をかへり見て、先は吉凶を御考可被成候。ある宗匠、都東山松林院に招かれて

また飛ぬ遊びや梅も注連の内

〔廬元〕

是は定て飛梅の事候はん。句の好悪は免も角もあれ、飛梅とは菅家のむかし配所に飛たる梅にて普く人の知りたる事なれと、其梅の飛たるは吉か凶かの分別もなきは無念の事にて候。此等は自己のはいかるをはやし上られて、後世を知らざる愚昧のいたりと可申候。惣而自己を顧事は、俳諧にかきらす候得とも、別而俳諧

は趣向に泥^ミ句作りにつのりて、大かたあやまり有物にて候得は、能々御慎可被成候。」(オ八)

一、発句を聞事、成ほと後学に成候事^二候。しかし、其聞やうに二ツの伝有之候。一^二題、二^二作者と申候。一^二題と申は、先とて其句の題を聞て其後句をよく味へし。題を先に不聞候ては、一句の余情も風姿の働も聞へかたく候。たとへは

桐の木に鶉鳴なる坪^坪の内

といへるは、鶉の句にも桐の木の問題にもあらず。田荘の酒家といへる題なり。夫を知らざる故に、桐の木は樅にも榎にも動くなど、評する人も有之由。題を知らぬ故也。あるひは

古池や蛙飛込む水の音

も蛙の問題にはあらず。閑居の詠成へし。

春も漸けしき調ふ月と梅

といへるも、月にもあらず梅にもあらず、全く春興の題也。それを(ウハ)句中に鶉とい、蛙とあれば、其句也と聞ゆへに、余情も風姿も面白^{面白}所を知らざるにて候。是等の事も節文集といへるを見候得ば、其節々の部立ありて、初午の巻頭に

初午に狐の刺しあたまかな

といふ古翁の句を出せり。此句は初午の句にはあらず、剃髪^{剃髪}の句なり。其上そりしとは過去のしにて、その日の事にも有へからず。剃髪^{剃髪}の詞書有^有てさひしくおかしき句也。初午の問題には心得かた^二候。二^二作者とは、先に作者を不聞して句を能聞得て、其後作者を聞へし。作者を先に聞候得て、其人に褒貶あれば、あるひはしつみて聞へかたく、あるはさけすみて能句を聞はつ事有^有。其人によつて句を聞候はんは、自己の稽古にならて、却而害と成事多^多候。おのか心に聞得て後、作者の名を聞候はんは、挨拶は時の会釈あるへし。先々人の句は誉ておくか宜候。宗匠分の人と

ても骨肉の」(オ九) 門人ならては、猥に加筆などはせぬ事^二候。されは適々発句をもちあるきて、人さへ誉^レばやがて自讃する族は、

笑止千万^二候。師たる人の外は、皆人座席のあいさつ成事を知らぬ愚昧、世間に多く御座候。とても御楽被成候はんには、師を御撰候て礼義を尽し、師弟の約を不違やうに可被成候。礼を知らざるは俳諧にあらす。しかるを、世間自門他門ともに不礼をとがめ不義を諫れは、それは不風雅也、是は理屈也と、唯行に行過て、俳諧は泥田棒とやらんに覚候事、言語道断の事^二候。礼なく義なきを道と可申哉。さはいへ礼義く^二とつ^二のり候はんは例の実学者とて我門に柙をさして節分ならでも防可申候。されは、虚実の扱より賢愚得失のさかぬ能々御覚語可成候。たとへは、虚実の扱い人の上^ミに立て注進報を聞候はんは、真偽のさかぬの計かたければ、それを驚き是も驚は、例に言語の姿情をしらぬ故也。其姿より其^二(ウ九) 語品を知ば、いかなる急事急難とても、驚も有、驚かぬも有筈也。ざるを急事の注進にその人をしらす、適々俳諧の機変を、障子、垣越しに聞はつりて、其手はくはぬく^二と例の行過たるは、必注進の人の心になつきて真の注進をも止^ム事有。ざるは、頭人の行過より、忽国家の難儀となる物^二候。そこを虚に居て実を行へば、必ずじなき注進とはおもへとも、其聞時は真に驚き退て、其事をさばく時に真偽^二の塩梅有へき事^二候。此等は注進報にかぎらず、且暮の茶飲^二にも人^二和とは爰の扱を申にて候。一、発句に詞書の事、強て不好事^二候。但、饒別、祝詞、追善などの時は、ほつ句に其心あまる事有之時、其句の聞へ易き為に端書を添る事にて候。景物節分^二の発句に詞書を加るは、無念の事と御覚可成候。古翁一とせ

鞍壺に小坊主乗や大根引

」(オ一〇)

といふ句に、大根引といへる事を、と端書を添られたり。此句は

詞書なくとも可聞を、大根引といふ名目はひとへに俳諧の名類なれは、貴人の高位の知りたまはざるを氣遣て、その事を先に断申され候。又有年、越人か句に

散る時の心易さよけしの花

といへる句を古翁に窺ひしに、此句ちからなし。詞書有てんやとて、僧にわかるゝとて、と端書を添られし事有之也。此等に御思慮あるべく候。

一、古来より選集の発句を手本に被成候事は御了簡可有事^二候。選集の発句何百章有之候ても、発句と申は纔に二十章には過へからず候。その謂は隠者の撰集なとすへて入料の沙汰に及候得は、其余慶を貪らんと新古好惡のゑらひなく句数を待得て板行し、又よしある人の撰集なとは、曾而入料の沙汰^ニは「^{（一）}」不及候得とも、其俳諧信厚に手筋を尋縁を求て、そこに書入^{（加入）}を頼ぬれば、撰者の心には入されとも、黙止かたくて書入たる多く御座候。此等は一集の杜撰と申へけれど、畢竟濟度方便の為なれはと、しはらく見ゆるし可申也。撰集の発句なれば、みなく能句と思召候は、御了簡違にて候。例の推量もかゝる所よりと可被思召候。真の撰集と申は、俳諧にはいまた無之候やと存候。撰集の中にも御覧候へて可然は

東華集 西花集 夏衣 葛松原 続五論

此等もほつ句には例の杜撰^{（マダ）}も候得とも、あるは発句の伝を述、あるは附句のさはきを出され候へば、そこらに御工夫も可有事^ニ候。おくの細道は常に御秘藏可被成候。其外にはさして御覧候得て益有集は覺不申候。只面白^{（面白）}のみにて候。先師常に申され候は、集の巻くは門人の為にあらず。天下の人を面白からせて、往く敵を味方に附へき^{（オ）}はかり事也とぞ。

一、発句に、理屈といふ、古風といふ事は、今名ある宗匠達も折く

出され候へば、嗜むべき事第一^ニ候。此ころ承侍へる

盗人もかくす罪なしけふの月

〔廬元〕

忍ひかへしうかめて憎し猫の恋

〔全〕

いやなから頭の雪や氷室守

〔麥阿〕

御留守とて戸はたてられぬ鳥居かな

〔童平〕

是等を理屈と申候。さしもの宗匠も例に己をほこりてかへり見のなきゆへに、かく世間には笑はれ被申候。又、古^キ句は

祢宜殿の留守の鼓やかんこ鳥

〔麦阿〕

みの鷲の町をありくや五月雨

〔全〕

是等を古^キ句と申候。又

雪間つむ我紙衣手に若菜かな

〔廬元〕

鶯の紙花散りぬ春の雪

〔全〕

是等は、古^キ中にも賤しき句と申候。其謂は、畢竟淨瑠璃頌唄の文作にて、風雅の本を忘れたると可申候。不道化とも申候。又勿論と申句有之候

羽子板の絵にもかゝれぬ隠居かな

〔珪琳〕

ひとり子の年とりやさし豆二ツ

〔湖中〕

木のほりもけふはしかたし櫛とり

〔全〕

是等を勿論と申て、余情もなく風姿もなく、例の始中終といひ詰たれば、風諫の道理もなく、好惡の論に及はす、発句にあらずと申にて候。

一、品題の中に、発句になりかたきも有之事^ニ候。是等和歌にも其沙汰有て、ふかく案して功なき題は、言葉ほとよく取結ひてそ置へしとぞ。まして俳諧には多くある事^ニ候。品題の中にも霧霞の^{（オ）}類は、和歌の賞翫にて候得共、俳諧にはほそりて能句なりかたく候。あるは、初午、卯の花の類は、別而発句になりかたき物^ニ候。近年は初午の摺物とて年々出候へとも、初午と存候

句は一句とても見へ不申候。祇園会にも里祭にも動申候。題の動候は発句にあらず。附句とても其心得有之候。しかるに、世上には初午とさへあれはその句になり、祇園会といへは其句になりて、動不動の論なきは、たとへは貴は皆主と思ひ、老たるはみなく親にして、年少はみなく子也と、終五倫の道をうしなふ。浅間敷事に候はすや。此等の作者を守り「て」するを、世にケイアン先生とも浮世宗匠とも大壺とも末社とも申由候。その謂は、人を誨の師にはあらで、それらのうつ人を見こみて、日夜に諂ひ、明暮にそやし立、弁舌筆頭に己か妻子を養育せんとす。かりにも風雅の名をからずは、いかて一日を安隱に過すべき、恐れても恐るへきは疫神なるへし。御油断有ましく候。

―(二三)―

一、句作りに相応不相応の事、是又和歌連歌の家にも其論有之候得共、まして俳諧の日用には、姿情に先後の論あるより、相応不相応は有之事候。此頃世間の発句を見候得は、舞雲雀と申、普く有之候。雲雀の舞と申事は、決而有間敷候。雲雀は揚^ス、落^ス、あるは子を思ふ芝生かくれなと、和歌の諸抄にも有之候。舞雲雀とは、別一種有之や。此等を不相応と可申候。一とせ露川か歳旦の脇に

日は三足の烏囀^ル

とせしは、鬼界、高麗はしらす、世に変化物の鳥なるへし。大鳥の囀^ル事なし。小鳥の舞ふ事は決而無之事候。

一、物の名を略する事、多有之候。俳諧の俗談平話なれはに候。たとへは、大根をダイコ、温飩をウドン、女房をニヨウボ、嫁入をヨメリ、^②凌簾をノレン、合点をカテン、新茶をシンサ、焼香をシヤウコ、精進をシヤウジ、念仏をネフツ、此等の外にも可有之候。言を略する事は歌書にも多く有之事候。然とも、燕をツバと、^③「土串をツクシ、」煙をケムといふ類は、一物の埒^④なければ、

世上に通用しかたし。言語にも見^ミレバ、不見^ミザレバ、聞^キカネバ、聞^キカネバ、不聞^キカネバ、の類は多可有之事候。是等は諸国通達の俗言^⑤候。

一、発句に切字の事は凡焉哉乎也の類にて、皆々助字を用てそこに句を切^ルとは申候。

一、焉らん ○焉止らし ○矣ん 一字撥也

一、哉かな 是には称美、歎美も有

一、耶や 是を疑のやといひ

一、哉や 是を称美のやといひ

一、也や 是を口合のやといひ

一、乎か 疑也。其外疑の詞は皆々切字也

何、誰、何国、何所の類は、助字ならでは疑て決る意にて相對切^レ也。○来けり たり けれ 此来の字は、莊子に語余の^⑥「所ぞ、物を指の詞也助字となせり。從來の意にて決定の詞也。○所ぞ、物を指の詞也」

○社こそ、或は己所こそ。○止し、句作りに三世のし有^⑦。○矣ぬ、畢矣也。○不矣は切字にあらず。下知は皆々余韻也。エ

ケセテネヘメエの類、切字は大かた如此に候。此外、○挨拶切、○心切、○中の切、○無名の切、○を廻し、○に廻し、○大廻し

のたくひ、古今抄に御考可被成候。切字計を覚候ても、抱字押字の有所によりて、○やも、○哉も切ぬ事有之候。ある人昔の歳旦

に、去年隱居したればの詞書有て

喰^⑧つみや山居の味を覚へそめ

此等、例の推量先生にて、切字の道理をしらぬ故也。山居の味をと抱へたれば、上のやの字は切字にあらず。○山居の味の覚そめとか、又は○山居の味を覚けり、又○喰^⑧つみに山居の味をさとりけりとあらは、隱居の詞書より^⑨「悟の字は一句の眼なるへし。此等に、押字抱字の事は御工夫可被成候。たとへそのせんさくは

しらすとも、さしもの宗匠、一句のくた／＼しきに、己をかへり見ざるは、笑止千万^二候。

一、大廻し、○を廻し、○に廻しの事は、如仰、世間につたへ候は、下より上へ廻り、その字より句を廻すと申。御心得なき筈^二候。此等も例の推量なるへし。惣して廻しと申て切る道理を知らぬ故^二候。廻すと申事は、句を上へ下へ廻す事^二あらず。いひ廻すと申にて候。今たとへは

大回 から崎の松は花より朧にて 面白かるへきか、とふかかふか、といふ事を十七文字によく賢くいひまわしたる事^二候。

を回 青くてもあるへきものをとうからし

青くてもあるへきものを赤くてそのからさもおもひやら^(一四)る、唐からし哉といふを、をの字にて能聞へるやうにいひ廻したるに候。○に廻しも皆是に准して御存有へく候。一句を転例する事にてはなくて、長きを短く句作り候へは、そこに心詞を残すゆへに、切字の埒^(四)を御悟可被成候。

一、発句に本情と申事は、いかにも有之事^二候。はいかゝの俗談平話なれば、たとへ月花といへとも、誉ておかしき時あれば、譏^リておかしき時もあると、先は本情を知りて、後いかやうにも曲は有之事^二候。たとへは、むかし

寐た家をにくむやうなりけふの月 ^{〔乙由〕}

明かゝる山よび起せほと、きす ^{〔廬元〕}

是等は全く本情を背たるに候。前章は中秋の月見なれば、その清冷を称して其後の曲節は有へけれど、にくむやうなりとは全く作者の意にて人の見ざる姿也。難せば^(一五)「冬^(オ)の月なるへし。さるは枕草紙にも例あり。又、後章も時鳥の賞翫をしらす。明はなれぬ頃はひこそ郭公は面白あはれにも有へけれ。何ゆへに呼起せなるや。呼戻せなとあるへき句なり。此等に往々御稽古可被成候。

一、絵賛の事は別而子細無之候。併、花鳥の絵賛は前以その句の貯もある物に候よしは、さしあたりても花鳥の句にてすみつき事^(一六)候。絵賛の事は、唯人物画像の賛にて候。此時は其人を能く知り能見覚へて、その賛の動さるやうに可被成候。昔ある宗匠、鍾馗の賛をか、れけるに、その図は釵をひつさげて草むら^(一七)にらみたるに

虫かりやかくれすましてきりはたり ^{〔廬元〕}

此句鍾馗ならても有へき句也。殊更虫狩に釵の入用なし。例に其人其姿を論せざるのあやまちなり。同じ図に^(一五)ある人賛して君かため草をわけてや葉堀

此等誠に鍾馗なるべく候。貴妃か病を見かねて大君の為にも薬はらんとは、その人をうしなはず。其図の姿を破らす。此等絵賛の事御存有べく候。

一、脇の事、いかにも平句とは違申候。一句も文字とまりにすへしとは、初心に教る事^二候。此趣は古今抄に御考可被成候。附かたの事は、安思^(案思)やうも平句とは格別の事^二候。畢竟、脇は発句の下句と御覚可被成候。さるによつて、平句は前句にむかふて附句を案する事^二候を、脇は発句の余情を句に作り候へは、発句の方より出る物に候。前より出ると前に附るとの違ひにて、脇と平句との差別を御考可被成候。しかし、初心の人にはしらせ申さぬ事^二候。却而惑と成可申候。

「^(一六)」

一、第三の留りを〇て留りにかきりけるは、当流の発明にて〇らんといひ〇もなしも〇文字留りも、是等^(是等も)にて、一句の吟声に拍子を残さず。四句目かろ／＼ととりつきかたきゆへに候。されは三ツ物に終り候時は、其沙汰に不及。四句目かろ／＼と附かずしては一卷成就せず。起請^(起請)転合にも不叶候。

一、四句目の軽^キは勿論に候へとも、世間にいへる四句目は菅神の

御代句なれば、かるくすると申事、全く其謂なき事^二候。其

故は、神の句ならはいかにも敬て案すへきを、只かるく^一と籠略にする事有へからず。其上、追善、追悼の俳諧に神の御代句あるへきや。四句目は百韻の成不成の所なれば、句重き時は五句目の地に取つきかたく、まして第三迄の骨折を見せんするさかひに候へは、いかにもかるく^一する事^二候。されは四句を決前生後の句と申て、功者のすべき時^二にて候。口伝。

―(ウ六)

一、月花の事、月は夜有昼有ゆへに面毎に出て、花は四季に有故に折毎に出申候。喩の花は、季の言葉^一を結ばざるはみな^二春季にて、みな^一植物の去嫌有之候。当流には無季の生花に不植の正花と申事無之候。然に、ある人、晋子門人のよし、此正花論を難して無季の正花、不植の正花も有へきとて

妾ふたり小倉の紅葉嵯峨の花

といふ句は雑なりといへり。此等全く蕉門の正花論をしらざるも^一しらす。古翁曰、花は桜にあらず、さくらにあらざるもあらず、とは唯心の花をといふ事也。今、此句を見るに、その妾を愛するや退るや、全く一句はその二人を愛すれば、己か心の花ならて、己か心の春ならて、己か心の雑なるや。己か心の暑なるや、寒なるや。花紅葉は秋の正花なれと、花と紅葉を結びたるは、花にひかれて春也。」^(オ七)花に郭公をはるとする也。その外、植物の去嫌を論し候へば、是等は月花の定座を漸覚て月花の扱ひを知らされは、今更諫るにたらず候。

一、月花は風雅の的也迎、折毎面毎に出て一座の定数有。殊に古今抄にも月花はなくて叶ぬものと心得て、強て一句の奇を好むへからずとあり。何故に風雅の的なるや。何故に定数有て無くて叶ざるや。何ゆへに面も折ことに配れるや。

○和歌には雑の部とて無季の歌あるを、発句には何ゆへ無季の句を

ゆるさゝるや。

○譬の正花の、華聾、花姫より、花鯉、花かあらし、花塗、花うつほとても、何ゆへ植物の去嫌有之や。

○風雅といひ俳諧といへる、まして正風体とはいかなる差別有や。是等は仮初の書面にはあらはしかたく候。月花を」^(ウ七)風雅の的成事、御心得候へは、みな^一埒の明く事にて候。しかれとも推量には済ぬ事に候。御執心^二候は、終には御伝受可申候。

一、表八句之数は、是も一通りにては済ぬ事^二候。先発句は大極の一に興、脇は天地開^テ二と成り、その天地の中に人を生す、第三也。その人に木火土金水の五姓備る。是を以、八句の数也。名残の裏、又八句。本を忘れざるのゆへなりと伝へ候。

一、表に神祇以下の出さる事、是も右八句のうへにて、御悟可被成候。表八句は、漸天地開^テ初而人を生したる所なれば、いまた神祇もなく、釈教もなく、恋も名所も述懐旧、まして古人も有へき事なしと御覚語^一可被成候。同字も許さざるも、いまた物二ツなき道理にて候。

一、三ツ物の事、天地人の三才と申も道理有之事にて、殊更」^(オ八)祝儀の時は能名目にて候。然とも実義は少々謂有之事^二候。先、発句、脇とはかりは歌の体にて、ことに俳諧歌といへるに紛候。本より脇は例に附句とのみにあらず。第三よりはじめて、附句の意なれば、こゝに俳諧の連歌なる事をこはる為にて候。しかれは祝詞^一の天地人の三才といへるも一通りは宜く候。口伝。

一、当流に和漢の俳諧無之事は別而子細なき事^二候。漢句は大むね対を取候のみ。二句の間に風姿なし。姿なき時は余情なく、余情なき時は例に風諫の意なく候。しかれとも、適々模様に臨ては、有迎も強てとかむる事^二は無之候。

一、俳諧は兎角行脚せされは其術を得かたしと御覚語^一被成候事、

言語道断、御了簡違にて候。前々より申候通、当流の俳諧は句を能達者にするのみ称するにては無之候。」(ウハ) 全く身を修め家を齊可申学問に候。然者、先能身を修め家をと、のへて後、手足の達者に余力あらん時は、名所旧跡を御見物候はん事は、俳諧を楯につかすとも成るへき事候。是等の事は、世間には貴公のことも、例の推量に覚たかへたる人も有之にや。今はむかしの事なるよし。ある武家の何某、例に推量の蕉門を取立て、多くの門人をつかたらし、知行取の分限を点者宗匠の格にうかされうかれ候ゆへ、果して君辺のつきあひもおもはしからず。いまた弱年にも足らざる一子や、活木の花前髪を落し、己は病身不行歩をいひ立て、家督を今の弱年に願ひ譲り、扱こそ己か俳諧の時得貞に、名を隠し身を忍ひて、京大坂をかけ廻り、美濃尾張を経めぐりて、人のうしろゆびも知らざる俳諧をいひちらしたる人も」(オ九) 有たるよし聞つたへ、言語道断の罪人かなと存候。其謂は、己か務さかりを俳諧にかへて、上をかるしめ、役人をあなとる。さるは、一己の科のみかは。此門人此意を伝へて、面／＼今日の職をそらし、我も頓てはと羨む族、日々に出来ぬへし。さあらは、忠孝の道をやぶり、五倫は無下の理屈にいひ落し、先浅間敷事候はずや。天道を恐さるの愚者ならん。さまで行脚せずしてならざるものならは、俳諧を道とはいふべからず候。むかし、古翁は此正風を天下に弘めん為に社、道心の行脚は企申されき。しかれども、其道古翁の一世に行届されは、先師は師命を荷ひて東西南北に漂泊し、今や天下に蕉門を踏ひろめたるは、全く東花坊か働にてこそ候へ。其外の行脚ともは、人をおしゆるものにはあらで、皆々金銀を貪りありく者ともに候。しかならず、御油断被成間敷候。」(ウ九)

一、愚坊にも宗匠成りをいたし候へ、何分御取持可被下旨、先以忝御懇志候。いかさま世間には宗匠成りとやらん有之由、承伝へ

候得共、何とも心得かたき事候。惣して宗匠と申事は、官にても職にても無之候。一座の連中称して宗匠と申、天下の俳人尊て宗匠と仰くのみ。もとより知徳兼備の人ならで、さは仰かぬ事。仍而みづから宗匠と申謂無之候。たとへは、軍に大将のこく、将には八将有之。所謂○仁将○義将○礼将○知将○信将○猛将○強将○勇将、是也。是各其一名は得たれとも、いまた大将の任ならず。太将はその八将をつかふもの也。あるは、太夫のこく、脇より難、子かた有、地うたゐ有て、各其一芸には名を得たれとも、太夫は一部の事足り、理をさばけは、各太夫にしたがふは、是太夫の任也。孔夫子も十哲面々の方には及はずと誉たれとも、その十哲は猶孔夫子つかふるゆへあるかごとし。かく宗匠の任は重きものに候。愚坊ごとき」(オ二〇) 御す、めもはつかしくこそ候へ。其上宗匠成りの事は、いか成ル人に対しいかなる方より許すぞと承合候へば、只その宗匠仲間とやらん仲間入をいたし、向後愚評をも受てたまはれかし、御鼈肩をなど手をさげて、当日の連中へ頼申事のよし。然らば、宗匠といふにあらで、畢竟諸連中の蔭にたちて点料をむさぼり、妻子をはごくまん為のはかり事と見へ申候。いでその宗匠仲間とやらんは、いか成人ぞと承候得ば、歴々の末も有中に、きのふは遊里の轡とやら鐙とやら、今日は例の宗匠成りより編綴を着し、熨斗目をまとひて、座席に先官の後官の争ひ有之由。愚坊など、今日仲間入いたし候はんには、例の末座につらなり候はん事、今生後生の無念と可申候。さるある人の曰、尊からずして高位に交るは、風雅の道にもあらずやと、例の開出し習に申され候得とも、世間にもかく心得たる人／＼も有之にや。」(ウ二〇) 例の宗匠も大名高家に交候よし、此等はいく御思案可被成候。尊からねとも高位に交るとは浅ましけれとも、人並の事候。遊里のくつは、河原役者は高位に対しては人倫にあ

らすして、高位に交る事、あるべき事とも不存候。さるは、役者もくつはも、大名高家の御句に連ね候事は、勿躰なき事^二候。此等は、能々御慎可被成候。俳諧は一步踏違ふより、例のうかれて千里にかけり、例のほこりて上をかるしめ、己を忘る、物にて候。只俳諧は老後の楽にといへる古翁の金言、御失念有まし候。

一、虚実の自在と申事、是又日用人和の肝要^二候。其謂は、朋友に善有、悪ありといへとも、そのあくも退かたく、又善^二も進かたき事あり。さるは朋友にも傍輩といひ、同職同派のちなみなれば、全く不善とはおもひなからも、日々に交る事有之候。譬は博奕好色のたくひ、夫を己か心にあはねば^{（オ）}とて交りを断は、虚実の不自在に候。己はかるたを手にとらずと、全く色を好されとも、其人を隔てず、隔られず、憎れず、譏られざる、是を虚実の自在と申候。あるは、下戸なれとも上戸に交り、俗なれとも僧に交り、唯一の社人なれとも滅罪の僧に交る、己よく信なれば交りに流る、事なく、まして悪行に組する事なし。終日にかたり終夜に馴なしむ時は、其人の信も恥て自ら其悪行は止^ム物に候。是を諷諫の道と申、孔子も例に諷諫を誉給ひしは、今の虚実の自在なるを誉給ひしとぞ。爰を以、親鸞聖人も雑行雑修を嫌ひなから、諸神諸菩薩もおろそかにすべからず、我信せぬまでにてこそと、此等に聖人の虚実自在を御信向可被成候。友と等く悪を好み、交りなればと色に溺^{（ト）}候はんは、学文も入らず、俳諧も入らず、共に^{（二）}鳥獸の惡臭に忌るゝにことならず。世にいふ、正月の博奕はなくさみとや、是又言語道断の事に候。一年の月日、その業、その職にいとまなければ、あら玉の春をむかへて、元日より日々の祝事は何事そや。又、此一年、家内無難に無病息災のまつり事として、屠蘇白散をくみかわし、ほうらゐを飾、注連を曳、清浄正直を神国の風とて、鏡餅とは面／＼己か影をうつし、己か行跡

をたしなみ改べきのおしへなるを、その屠蘇酒にくらひ酔、その鏡餅に腹飽て、剩天下国家の誠なる博奕を慰事の始と覺たるは、誠に神罰仏罰をも知らざる人にや。よしその親は一座一興の慰にあやまつとも、子はその悪行を見習ひて、終には己か家を亡し、終には己か身を失はん事、人の子の悪にはあらて、人の親の悪なればなるへし。誠に正月のあそひならば、平日勘略の余計を見て、音曲乱舞の歡樂^{（オ）}にも遊へよかし。浅間敷世間にならふへからずと、先師常／＼申され候。

一、虚実の変と申事も、虚実自在の事ながら、しばらく先後の謂有之候。其趣は、先人を知り、言を知るの差別^二候。言^{（言をしり、人をしるを申す）}を知ると申も、其変を知る事也。渠は我親兄に等しと一向に思ひ入たるは、実の凝たる物也。我こそかく親兄の思ひをなせとも、元他人なれば、終に親兄にあらざる事も出来ぬべし。その時その人を憤りて、思はざる義絶の中となる、世間に多くある事^二候。しかれば、初よりいかほど入魂はするとも、元は他人なればと覺語いたし候へは、むさと一大事をかたらず。かたらされは其人の背く日ありとも、終にうらむる事あるへからず。是を虚に居て実を行ふと申。その時変におどろかぬを、虚実の変とは申候。亦、言を知ると申は、平生その人は疎遠に下腐下劣の小人なれとも、いふ事は折にふれ時によりて^{（三）}賢才の人も及はぬ言あり。是をも一筋に身下すは、例の実に凝たる也。虚実の抜ひには、終に見くたす。見くたさねは、其能言は耳にとまる。是をさして言を知ると申候。是又此変ある事を知るゆへなり。されは、不知言無以知人也。あるは、三人行必有我師焉といへり。いてや我家の俗談平話にも、或は道具模様の物好といひ、料理といひ、家作^リといひ、まして公事訴訟の大事など、必一己の了簡に決すへからず。膝^{ヒザ}とも談合といへる謬も、かゝる事にて有べく候。是を以、母必母固といへり。

誠に、水の火を尅する事は学すとも知るへけれど、それも薄鉄（薄鉄）の鑄（鑄）に焼（焼）けは、水（水）かへつて火に尅せられて湯と成り、金石は水底に沈む物なれと、薄板一枚隔て水上にうかふ変をしられは、あやまち多し。初より変を知る時は驚かすあやまたす候。ざるを、常住の思ひに居る人は、後生菩提はさらにいはず。家宅をかさり、美服をまとひ、（オ三）色を好み、美食に飽て、終には己か家を亡ほせば、世をうらみ人を憤り、金銀をいやしめて、貪りに高ふり、高官貴人の前に諂らねば、道人（道人）と世にそやされて、果は流を枕にするより橋の下の行倒となれる。口おしき事にて候。

一、愚坊弱年のむかし、いまた師をつかへざる頃は、人の眼前に誉さへすれは発句也と心得て、自讃し歩行候程に、普（普）の人に後指をさ、れ笑はれ申候。その句とはあまた有之中に、或は武家の親子に挨拶の句を乞れて

月花の蔭につくはふ蛙かな

是等たいこ末社とやらんか挙動にて、世に諂の否味也。また

嘘の科けつり大根や恵ひす講

盗人のかくれかねてやけふの月

たか入の輪をく、りゆく蜚かな

都から種子まく伊達や雛壳

此外もあまた候ひしか、此等は理屈といひ、古（古）と言、俳諧にも発句にも有へからすとある人の一口にいふけされて、初て恥を存候ゆへ、此道に憤（憤）を發し、扨こそ師を扨てつかへ申き。然といへとも、一朝一夕に意を得されは、十二年の月日、対面の棒頭は数知らず、百度千度の文通とても前後吃られざる事なく、就中、勘氣をさへ蒙りたる事有之候。一とせ一夏百題の句を作りて机前にか、い候得は、其百句の中、漸六句点をかけて、此中にも五句は集の埋種にも成へきのみ、発句といふ物、一句ありと初て潤

しき顔色は見へ申候。その句は

竹の子の客は藪からとおしけり

愚坊思ひかけなく、此句は一練一鍛にも不及無心所着の句なると申候得は、師は笑（笑）その事也。そこに発句を悟るへし。此句は（オ四）古翁の

鶯や餅に糞する椽の先

塩鯛の菌くきも寒し魚の店

此句の法有りて尤称すへき句なりと申され候へとも、本来も愚坊未熟候故、兎角其意を得かたし。問かへすへきを恐入て尚（尚）暗路をたとり候へは、其後も益叱候ひし句々、凡四馬も負かたく候はん。漸師誡の八九年、爾来扨はと発句をさとり候へとも、発句と可申はいまた十句には過す。皆々一座一興の句のみに候。しかれとも、例の理屈ふるみには落へからず、句はよからねと先は一座の発句に候はんか。此等に師恩の高き事を仰ても（猶）あきたらず候。万々御推量可被成候。師なき人（の）の謬、御尤の御事（二）候。穴賢（一）。

右は愚坊漂泊中、諸方答問之内三十一ヶ條、依御所望此度写させ、進申候。是にて大かた悟道可被成候。必御他見御無用。尚又貴面可申述候。 頓首

林鐘日

松水雅丈

雲裡（オ五）

湘夕言

雲裡坊は天津義仲寺の住僧なりしが、壮年より獅子庵の門下となりて蕉門の奥義を極（極）。二十年計以前より寺を譲りて門外に小庵を結び、諸国に行脚して正風を尋（尋）東武に及び、みちのくまでも門葉数千人に及んで其名をしたはずと言ふ事なし。予、公勤に自りて、延享の中比より、宝暦の中比まで東武に有りし時、再行脚有りて数

月を送られける間に、道の事ども教訓せられしが、別る、日に□□なりける時、名残りを此一冊に止おかれぬ。誠に有かたきおしへなるそや。猶はた虚実をよく学よと自筆の一章を残されぬ。」(二五)

雪折れを聞くねふる柳かな

明治三十六年三月上旬求之 未青

宝暦元年^未 仲春日写之 ^{大津}雲裡坊 門葉

^{江戸}和常

」(裏表紙
見返し紙)

(裏表紙)

『俳諧三十一ヶ條秘伝』奥書)

此秘伝之一冊ハ、勢州桑名ノ住、三四庵雲裡坊鳥巢仁杉夫先生ノ方ヨリ、門人五城楼下両後亭朱桃子ヘ授与シタモウ書ナリ。是ヲ朱桃子門人登米郡米谷任亀卦川桃西写シケルヲ、同門ノ好身ヲ以一枕亭曲肱子写サレシ書ナリ。後此君庵梅人先生ヘ伝ケルヲ、今度愚庵梅人先生ヨリ伝取ニ写ラク者也。可秘々々。

寛政五^癸年夾鐘下旬

^{静庵}美淵

〈付記〉

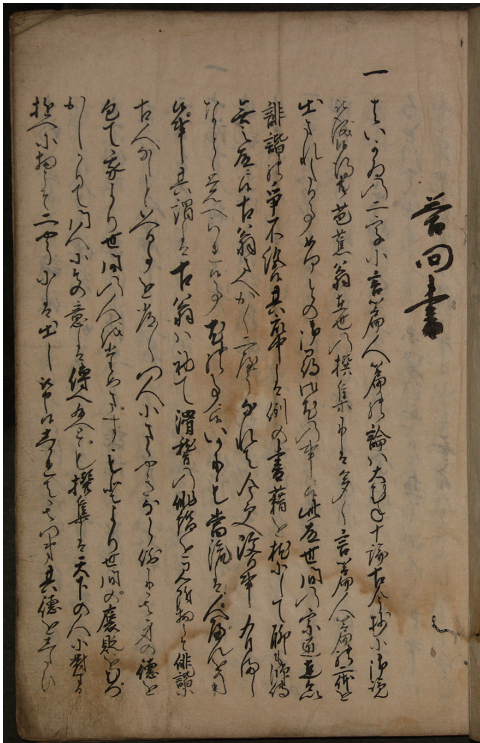
本稿は、科学研究費補助金(基盤研究(C))「人を結びつける文化」としての俳諧研究」(研究課題番号二六三七〇二五九、代表・伊藤善隆)の研究成果の一部である。

〔参考図版〕

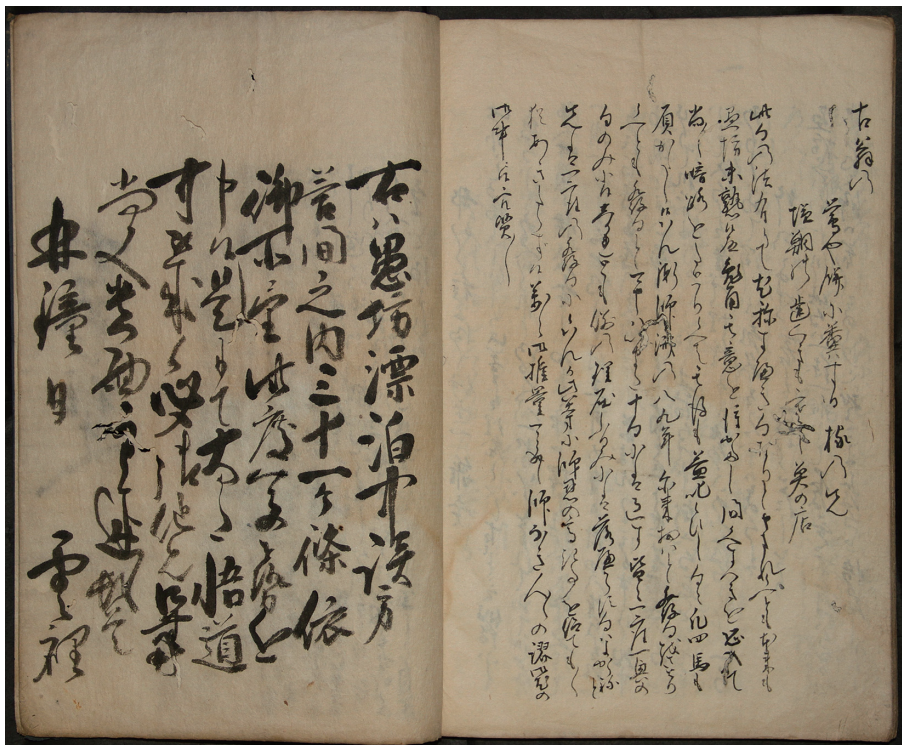
1. 『答問書』表紙



2. 『答問書』巻頭（一才）



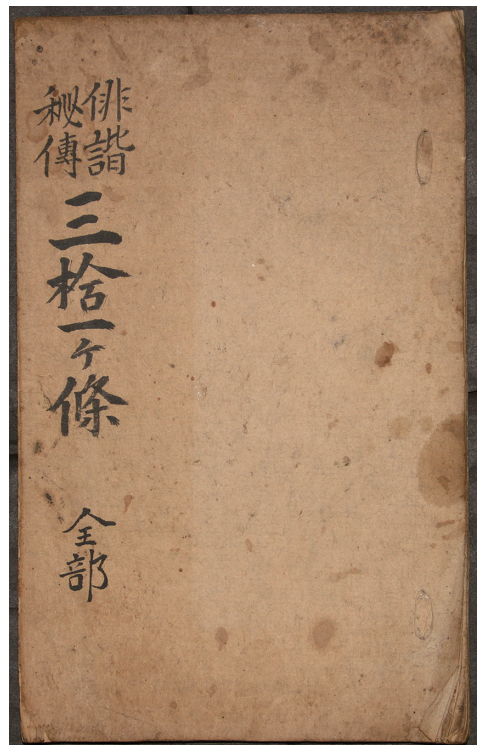
3. 『答問書』巻末・奥書（二四ウ・二五才）



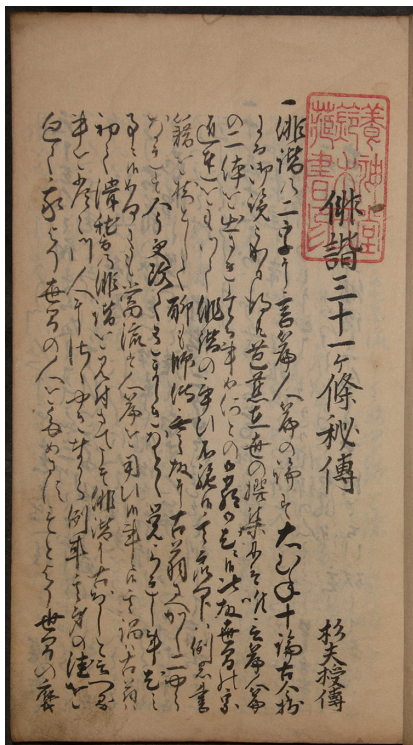
4. 『答問書』奥書（二五ウ・裏表紙見返し）



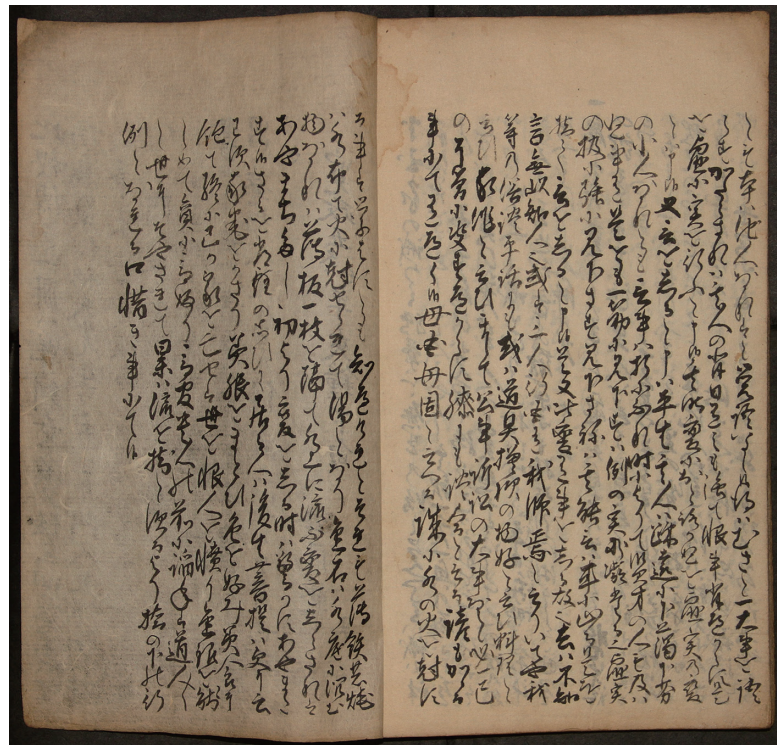
5. 『俳諧三十一ヶ條秘伝』表紙



6. 『俳諧三十一ヶ條秘伝』巻頭（一才）



7. 『俳諧三十一ヶ條秘伝』卷末(二四ウ・二五オ)



8. 『俳諧三十一ヶ條秘伝』奥書(二五ウ)

